

小説の中の吸血鬼 (1)

塩川千尋

吸血鬼が初めて詩の題材となった時を明確に指摘することは困難である一方、散文では吸血鬼が初めて登場する作品を指摘することは容易である。つまり、一八一九年に出版されたポリドリ「吸血鬼」だ。吸血鬼は、奇しくも「フランケンシュタイン」の怪物とほとんど同時に、小説に現れた。これは一八一六年、六月、ジュネーブ湖の湖畔に集まった四人、つまり、バイロン、ポリドリ、そしてシェリー夫妻が、二週間降り続いた雨に退屈し、ゴシック小説の競争をした結果である。そしてポリドリの「吸血鬼」と、シェリー夫人の「フランケンシュタイン」は、ゴシック小説を新たな、リアリスティックな方向へ向かわせるこ

ととなった。

というのも、「オトラント城」に代表される、中世のゴシック建築の城を舞台に、幽霊が登場する一連の作品や、超自然と思われた現象のすべてに結末で合理的な説明を与え、登場人物の恐怖心が生んだ幻想であったとするラドクリッフの作品と異なり、この二つの作品の主人公は、幽霊でもなければ、幻想でもなく、現実の存在として描かれているからである。「フランケンシュタイン」の怪物は、見る人に激しい恐怖心を起こす醜い姿を与えられた、フランケンシュタイン博士が作り出した実在の怪物であり、一方、外見は普通の人間とほとんど変わらない姿をした吸血

鬼は、人間の生血を吸う「不死者」である。同じ場所ではほとんど同時に生まれたこの二つの怪物は、やがて後の怪奇小説、恐怖小説に新たな可能性と影響を与えることとなるが、ここでは後者の吸血鬼を題材にした三つの作品、つまりポリドリの「吸血鬼」、シェリダン・レ・ファニユの「カーミラ」、およびブラム・ストーカーの「ドラキュラ」について述べてみたい。

吸血鬼といえはすぐにドラキュラという名を思い起こすほど、吸血鬼を世に知らしめた「ドラキュラ」は、吸血鬼小説の最高傑作であり、現在、多くの人々が抱く吸血鬼のイメージを確立した作品である。黒いマントに包まれた長身瘦軀、異様な目、鋭い犬歯——これは今では定着した吸血鬼の姿である。しかし、ドラキュラが誕生する前に前述の二つの作品に登場する吸血鬼は、全く違った姿で描かれており、一見、三つの作品は何の共通点も持たないかのよう⁽¹⁾に思える。ポリドリが描くルースベン卿は、「死人のよう⁽²⁾に青ざめた顔」以外、全く普通の人間と変わらない外見を持ち、「カーミラ」と「ドラキュラ」の際立った特色となつてゐる、生きた人間の血を吸う姿の描写も与えられていない。レ・ファニユが描く吸血鬼は女の吸血鬼、つまり

ラミア、それもレズビアンのラミアである。

しかし、三つの作品は、こうした外見上の相違を持つと同時に、構成上、大きな共通点を持つ——いずれも物語を展開する上で、吸血鬼伝説をおおいに利用している点である。ポリドリ、レ・ファニユ、ストーカーは三者三様の吸血鬼を作り出したが、その習性、超自然的な能力、弱点、そしてそれを滅ぼす方法（吸血鬼はすでに死んだ人間なので殺すという言葉は使えない）は、いずれも人々の間に語り継がれてきた吸血鬼伝説の中に現れる吸血鬼のそれと本質的に同じである。作品の中では、登場人物が吸血鬼を吸血鬼であると知ることが、まず第一の重要な点となる。そして、その正体を暴くことは、吸血鬼伝説に詳しい人物によってなされる。正体を知ったあとは、吸血鬼を滅ぼさなくてはならなくなるが、その仕事をやるのも、やはり同じ人物である。ポリドリの「吸血鬼」では、主人公オーブレイは、ルースベン卿が吸血鬼であることを人に言えない状況に追い込まれたために、彼を滅ぼすことが出来なくなり、結局、吸血鬼に敗れてしまう。オーブレイの敗北は、情報、知識が彼一人の中に堰き止められたことがもたらす結果なのだ。吸血鬼物語では、吸血鬼伝説にもとづく知識、情報

が決定的な役割を果たすと言える。ここでは、その点に焦点を合わせながら、「吸血鬼」、「カミラ」、「ドラキュラ」の三作を考察してみたい。

(一) 「吸血鬼」

散文に初めて登場する吸血鬼は、後の作品に現れる、一目見て吸血鬼と分かる特徴を持ちあわせていない。ポリドリは極めて抑制の効いた文体を駆使しながら、読者にもルースベン卿が吸血鬼であることをなかなか明かさない。ルースベン卿は、ロンドンの社交界に「風変わりな点で目立つ」紳士として登場する。彼の外見は、前述のとおり、「死人のように青ざめた顔」と、そして「死んだような灰色の目」以外、普通の人間とほとんど変わらない。彼は社交の場にしばしば現れるが、談笑する人の輪には入ろうとしない。彼の注意を引くものは、女性の笑い声だけであるが、まるで楽しそうな笑いに水を差すかのように、その不気味な目で女性を見据えるだけである。彼の正体が知られていないため、ルースベン卿は、その「特異性」ゆえに、「倦怠」が支配する上流社会の一種の寵児となる。

ルースベン卿が社交界に姿を見せ始めたのとはほぼ同時に、オーブレイという青年がロンドンにやって来る。ポリドリは、オーブレイがルースベン卿に強く引かれることに必然性を与えるべく、彼を幼くして両親を失い、莫大な財産を受け継いだ青年という設定にしている。彼の後見人は、財産の管理だけに興味を持ち、彼の教育には全く無関心であった。彼は「判断力より想像力」(二八八)を発達させ、「すべての人間は善に共感しており、悪はロマンスにおけるように、善を引き立たせるために神によって投げ込まれたもの」と信じている。要するに、彼は「詩人の夢が人生の現実」だと思いついでいる、世間知らずの青年である。金と美貌と率直さを持つオーブレイは、たちまち若い女性のあこがれの、そしてその母親の打算的な注目の的となる。こうしてポリドリは、二人の全く異質な人物を同時にロンドンの社交界に登場させるが、はたしてルースベン卿は、始めからオーブレイに、正確には、その妹ミス・オーブレイに狙いをつけていたのか、あるいは彼女が吸血鬼の餌食となるのは、単なる偶然なのかは明らかにしない。彼はただ、夢の世界で育ったオーブレイが、現実の世界に失望しなかった時、ルースベン卿に会い、強く引かれ

ると語るだけである。

オーブレーはその「尋常ならざる人物」に会ったとたん、想像力を刺激され、ルースベン卿をロマンスの主人公と思ひ込み、実体とは掛け離れた人物像を頭の中で作り上げてしまう。彼はルースベン卿を研究すればするほど、ますます引かれていく。やがて彼はルースベン卿が大陸へ旅行に出ようとしていることを知る。彼をもっとよく知るために、同行したいと願うオーブレーは、後見人から「年上の連中と対等の立場に立ち、不倫が冗談や賞賛の対象となってもびっくり仰天することのないよう、悪徳を手っ取り早く身につける」(二八九)のために、大陸旅行にでかける許可を得る。そのことを彼から聞いたルースベンと一緒に旅に出ようと申し出ることによって、彼をおおいに喜ばせる。

オーブレーがルースベン卿にひたすら魅了されるのは、この時点までである。彼を身近に観察する機会を得たオーブレーは、徐々に彼に対する評価を変えていく。ルースベン卿が、まじめで無垢な人を破滅させる、あるいは破滅させる人間の手助けを知ることになるからだ。オーブレーにとつて、彼は神秘のベールに包まれた、「なに

か超自然的な様相」を帯び始める。そして彼の感ずる魅力に嫌悪感が混ざり始める。オーブレーは吸血鬼の直接の犠牲者ではないが、「カーミラ」「ドラキュラ」に代表される吸血鬼物語の特徴である、犠牲者が吸血鬼に抱く魅惑と嫌悪感、早くも最初の作品に現れている。

彼がルースベン卿に対して感ずる魅惑は、彼の人生を大きく狂わせることとなる。運命的なこの魅惑は、彼を吸血鬼とのどうにもならないしがらみへと引きずり込んでいく。ルースベン卿の性格に疑惑を抱きはじめてたオーブレーは、彼が狙いをつけていると見抜いたある伯爵夫人の娘をその毒牙から守るべく、両親に娘に迫っている危険を教えると——ルースベンは若さと美貌と美徳を兼ね備えた女性を誘惑し、墮落させる天才なのだ——彼と別れ、一人ギリシヤへ向かう。

しかし、彼はルースベン卿の手から逃れることはできない。彼の行くところ行くところ吸血鬼ルースベンが現れ、彼から愛する人を奪っていく。オーブレーはアテネで、宿の娘アイアンシーを愛するようになる。ポリドリはアイアンシーをことさらに可憐で無垢で子供っぽく、妖精のような娘であることを強調する。吸血鬼の犠牲となるアイアンシ

一の哀れさを一層際立たせるためである。しかし、彼女は物語にベーススを加えるだけの存在ではない。主人公に吸血鬼伝説を教えるのが、彼女の主たる役目なのだ。

ポリドリは舞台をギリシャに移し、そこで初めてパンパイア(吸血鬼)という言葉を用いて、実際に吸血鬼に人間を襲わせる。彼がギリシャを選んだことは、うなずける。ギリシャ正教には吸血鬼伝説を受け入れる要素が多分にあり、したがってギリシャには吸血鬼伝説が広く深くはびこっているからだ。⁽⁴⁾現に、アイアンシーは吸血鬼の存在を信じ、「友人や家族と共に長年暮らし、生き永らえるために毎年、美しい女性の命を奪った生きた吸血鬼」(二九四)の話をつたひたびオーブレイに聞かせる。彼はそのたびに一笑に付そうとするが、ぞっと寒気を覚える。アイアンシーの両親は、吸血鬼の名を聞いただけで青ざめ、彼に向かってそれが実在することを断言する。

アイアンシーは彼に、吸血鬼の存在を信じないことの恐ろしさを教えるが、その言葉は彼の運命を予言する。つまり、

吸血鬼の存在を疑う人は、胸も張り裂けんほどの悲し

みを味わいながら、実際に吸血鬼は存在しますと告白せざるを得なくなるような、何らかの証拠突きつけられると言われている。

ことを教える。オーブレイが、最初に「胸も張り裂けんほどの悲しみ」を味わうのは、吸血鬼によってアイアンシーを奪われる時だ。彼はアイアンシーが、人々に語り継がれてきた吸血鬼の顔付を覚えてくれ、それがルースベン卿の外見とびつたり一致することに気付いても、伝説上の吸血鬼と彼を結びつけることはできない。ポリドリはオーブレイについて「ルースベン卿が超自然的な力を持っているという信念をかきたてそうな、多くの偶然の一致を不思議に思った」と言うだけである。

オーブレイが吸血鬼が人間を襲う場面に出会うのは、ゴシック小説の主人公らしく、禁断の場所に入っていく時である——彼は「遺跡の研究」のため、「日没後は、どんなギリシャ人もけっして近づかない」「吸血鬼が夜毎、饗宴を開く」(二九五)森を通ることとなる。彼がそのことを口にする、宿の主人とアイアンシーは、絶対に夜、その森を通ることのないよう、明るい内に帰ってきてくれとたの

む。しかし、もちろん、彼がそこを通るのは夜になる。研究に夢中になり、間もなく日が暮れることに気が付かないからだ。吸血鬼が登場させるにあたって、ポリドリはウォルポールが確立したゴシック小説の常套手段を使い、舞台装置を整えて読者に心の準備をさせる——吸血鬼の出現と共にやって来て吸血鬼が姿を消すと共に静まる、雷を伴った「嵐」だ。彼の乗った馬は稲妻に脅え、森の中を恐ろしい早さで暴走する。そして馬が疲れて立ち止まった所は、アイアンシーが吸血鬼に襲われている真最中の小屋の前である。

馬から降り、小屋に近づくと、中から女の悲鳴と、男の「押し殺した、楽しそうなあざけりの笑い声」(二九六)が聞こえてくる。オーブレイが中に入ると、男は『また邪魔されたか!』と言う。この言葉がローマの伯爵夫人の娘の一件を指していることは、読者にはよく分かって、彼にはそれとつきに理解することはできない。吸血鬼の特徴の一つである「超人的な力」によって、地面にたたきつけられ、危うく殺されそうになるオーブレイにしてみれば、当然である。そして作者がその言葉を二度と口にしなないため、彼はそれを忘れてしまったかのように思える。実はそ

の沈黙の中に、ポリドリはルースベン卿に対する主人公のアンビバレンスを浮かび上がらせる——オーブレイが今だに感じている魅力故に彼の心にある、吸血鬼と彼とを結びつけることに対する拒絶反応の現れなのだ。

アイアンシーを襲った吸血鬼は、彼女の死体に吸血鬼であることをはっきり示す痕跡を残していく。つまり、首には「血管を開けた歯の跡」(二九七)が残されている。吸血鬼の「証拠」を突きつけられたオーブレイの心は麻痺し、彼は「内省」を避け、「何も考えないこと」の中に逃避する。彼は「ほとんど無意識に」手に吸血鬼が置き忘れた短剣を持つている⁽⁵⁾。この短剣は、後日、吸血鬼とルースベン卿が同一であることの決定的な証拠となるが、その時ですら、彼は「まだ信じないことを望んで」いる。

アイアンシーを探しにやって来た人たちに助け出されたオーブレイは、ショックのあまり高熱を出し、うわ言を言うが、その中で彼は

ルースベン卿とアイアンシーに呼びかけた——何か不可解な結びつきによって、彼は以前の友人に愛する人の命を奪わないでくれと頼んでいるようであった。ル

「スベン卿に悪口雑言を浴びせ、彼女を殺した奴だと呪うこともあった。

ルースベン卿が吸血鬼であることを意識の中では拒絶していても、潜在意識ではそれを確信していることを示すうわ言である。それが意識の中に現れるのは、吸血鬼ルースベンが死の世界から蘇った姿を見る時である。

高熱を出し、床に就いているオーブレイは、「この時、たまたまアテネにやって来た」ルースベン卿の看病を受けることとなる。ポリドリは、その動機については何も明かさず「どのような動機からにせよ、オーブレイの状態を聞くや……常に彼に付き添った」と言うだけである。ルースベン卿の行動はどうも不可解だ。一度はオーブレイを殺しかけておきながら、今は助けようとしている。アイアンシーを襲っているところを邪魔したオーブレイを地面にたたきつけ、首を締めて殺そうとしたが、ちょうどその時光った稲妻にどういふ訳か動揺し、おそらくはアイアンシーを探しにやって来た人たちの足音を聞いて、未遂のままその場を立ち去った。確かにルースベン卿は、弱り果てたオーブレイの姿を見ることを楽しんでいる。オーブレイは、看

病してくれるルースベン卿がこれまでの「無気力な人間」(二九八)とはうって変わり、嬉々としていふことに気付く。しかし、彼が健康を取り戻すと共に、また昔の姿に戻ってしまう。そして時折、「悪意に満ちた、嬉しそうな笑みを口もとに浮かべ、じつと自分を見ている」ことに驚く。この笑みは彼の頭にこびりついて離れない。

一方、オーブレイは健康を取り戻したとはいえ、以前の彼には戻れない。アイアンシーの犠牲という、吸血鬼が存在することを証明する「証拠」を突きつけられたショックから立ち直ることができないからだ。彼はアイアンシーの思ひ出に満ちたアテネにいたたまれなくなり、ルースベン卿に、二人でまだ見たことのないギリシャを見に行こうと言う。彼がまた一緒に旅をしようとして申し入れるのは、「病気の間、やさしく世話をしてくれたことに対する恩義」を感じているからだと言うが、あの「笑み」が彼の脳裏にこびりついていることを考えると、彼にはまだルースベン卿に対するアンビバレンスがあることが分かる。「やさしく世話をしてくれた」という意識の中の言葉は、「笑み」が暗示するすべてのネガティブな意味を否定したいという願望の表れとしか考えられない。いづれにせよ、二人の旅

は、この二十ページほどの物語をクライマックスへと導く。

旅の途中で起こる、盗賊との銃撃戦は、ルースベン卿に「致命傷」を与える。ここでポリドリは「月の光は吸血鬼に力を与える」という伝説を利用する。吸血鬼ルースベンは自分の「死期」を悟ると、盗賊に「死体を近くの山の頂上に運び、死んだ後に昇る月の最初の冷たい光に晒してくれ」(三〇〇)と頼む。オーブレイは彼が死んだ翌朝、盗賊が「死体」を「放置」した山の頂上へ行くが、「死体」は消えている。吸血鬼は蘇生し、どこかに姿を消したあとであった。

オーブレイはルースベン卿が死ぬ直前、ある約束を強要される。彼は「私の、君の友人の名誉を守ってくれ」と頼まれる。そしてオーブレイが、彼の死をしばらくの間イギリスでは秘密にしておくことに同意すると、突然口調を変えて謎めいた言葉を言う。

「誓え！」死にかかった男は、勝ち誇ったように勢よく身を起こしながら叫んだ。「お前の魂が敬うすべてにかけて誓え！ お前が心から恐れるすべてにか

て、これから一年と一日の間に、何が起ころうと、何を見ようと、私の罪と私の死についてお前が知っていることを誰にも絶対に言わないと誓え！」

オーブレイは、激しい口調と「眼球が飛び出しそうな」表情に圧倒され、「誓います」と答えてしまう。それを聞いたルースベン卿は笑いながら身を横たえようと、息をひきとる。彼のこの迂闊な誓いは、やがて彼が真実を伝えられなくなることの一因となる。

ギリシャからローマに戻ったオーブレイは、ルースベン卿の畏から救ったと思っていた伯爵夫人の娘が行方不明になっていることを知る。彼は「何度も繰り返される多くのおそろしい出来事のために」(三〇〇)気が狂いそうになる。「むっつりと黙りこくった」まま、彼はイギリスに戻ってくる。以前のオーブレイを知る人なら誰にでも、彼の変わり様は明らかであろう。このことは、やがて彼が狂人に見えてくることへの布石となる。そして彼をそのような状態に追い込むのは、吸血鬼ルースベンとの再会である。

オーブレイが蘇った吸血鬼に会うのは、妹ミス・オーブレイが社交界にデビューする日である。しかも再会の場所

は、彼が初めてルースベン卿に会った同じ部屋である。彼がその時のことを思い出していると、彼は腕をつかまれ、『誓いを忘れるな』(三〇二)とささやかれる。オーブレイがようやくはつきりと真実を悟る時は、こうしてやってくる。しかし、彼はルースベン卿が吸血鬼であることを誰にも言わない——いや、言えないのだ。その誓いが彼を完全に束縛するわけではない。吸血鬼との誓いだけによって、主人公が真実を他に伝えられないのでは、あまりにもばかばかしい。ポリドリが、ルースベン卿が吸血鬼であるという情報をオーブレイ一人の中に堰き止めてしまうために取る方法は、もっと複雑である。つまり彼は主人公を、狂人ではないが、傍目には狂人に見えるような状態にし、たとえオーブレイが誓いを破ってルースベンの正体を明かしても、人から信用されないという設定にする。

ルースベン卿の『誓いを忘れるな』という言葉に心理的な束縛を感じながらも、オーブレイはそれを守ることを絶対的な義務とは思っていない。実際、彼は何度か誓いを破ることを考える。彼はまず、「死者」との再会にあまりにも激しい恐怖を抱き、ルースベンという名を口にするのも出来なくなる。それに加え、たとえ誓いに背いてルース

ベン卿の正体を暴いても、一体誰がそんなことを信じるかという疑惑が彼の心を支配する。大陸旅行から帰ってきたオーブレイは、「多くの恐ろしい出来事」のために「むつつりと黙りこくった」青年になっているが、これは吸血鬼に對する恐怖と、真実を明らかにしても信用されないという疑惑によって、急速に強まる。彼はただ一人だけで恐れ、思い悩む。彼は自らの手で吸血鬼をこの世から抹殺すること、つまり殺すことを考えるが、吸血鬼を殺しても無意味であることはすでに経験済みであることを思いだす。

やがてオーブレイは自閉症的症状を呈し始め、彼の容貌は狂人のそれを思わせるようになる。なす術を持たないオーブレイは、部屋に閉じこもり、妹以外の人間に会うことを拒絶したかとおもうと、彼に取りついて離れない吸血鬼の姿から逃れるために、夜となく昼となく町中を歩き回る。服装にも構わなくなり、知人が見ても「もはやオーブレイとは分らないほど」(三〇四)変わり果てた姿となる。彼は友人のすべてがルースベン卿の正体に気付いていないことに焦燥感を覚え、あの誓いがあるうと、ルースベン卿と親しくしているすべての人に正体を教えてやろうと決意する。彼は再び社交の世界に入るが、「やつれた顔と、

猜疑心に満ちた目はあまりにも人目を引き、心の動揺はあまりにもはつきりと表に出ていた」ため、やむなくミス・オーブレーは兄に社交界に出入りしないでくださいと頼まざるを得なくなる。

彼は後見人によつて部屋に閉じ込められ、常に医者に監視される。彼があまりにも「訳の分からないこと」ばかりを言うために、気が狂つたと判断されたからだ。しかし、オーブレーは激しい強迫観念に取りつかれていても、正気を失つたわけではない。彼は妹に『あいつに触れるな——私を少しでも愛するなら、あいつのそばに近づくな!』と警告しているのだ。

こうしてルースベン卿が吸血鬼であるという情報は、主人公の中に止まったまま、妹ミス・オーブレーが犠牲となるまで外に出ることはない。オーブレーが吸血鬼と誓いを交わしてから一年と一日目、ミス・オーブレーはルースベン卿と結婚式を挙げる。彼は妹の結婚相手が誰かを知った時、結婚を一日だけ延ばすように頼むが、狂人のたわ言としか思われない。翌日、つまり誓いの期間が終わつた日、彼は後見人にすべてを「落ち着いて」話すと、息を引き取る。この不気味な「落ち着き」は、もはやすべてが手遅れ

になつたという、絶望の深淵からくるものだ。事実、後見人は「ルースベン卿はすでに姿を消し、オーブレーの妹は『吸血鬼』の渴きを癒した」(三〇七)のを知る。散文に初めて登場する吸血鬼は、心臓に杭を打ち込まれ、首を切られて焼かれることなく、勝利を手に意気揚々と舞台を降りていく。

ポリドリが描く吸血鬼ルースベンは、あまりにも鮮明なドラキュラのイメージを持つ現代の読者には、あまり吸血鬼らしさを持つていようには思えない。吸血鬼らしさが見られるのは、月の光を浴びて再び力を蘇らせること(この場面が実際に描写されているわけではないが)と、恐ろしい力でオーブレーを持ち上げ、下にたたきつけることぐらいである。ルースベンがミス・オーブレーの血を吸うまでには、少なくとも一年ほどの歳月をかけ、兄の容体をきづかう振りをして足繁く通いつめるといふ手間をかけている。ルースベンはドラキュラのように、狙つた獲物に催眠術をかけ、無抵抗の状態にしてしまうという、ことを手っ取り早く済ませる力を与えられていない。彼はただ言葉を使えるだけであり、巧みな舌先で狙つた女に取り入る。ポリドリは「誰が彼(ルースベン卿)の力に抵抗できるか」(三

○六)と云うが、実際に彼が使う言葉は陳腐そのものである。「吸血鬼」の恐ろしさは、ルースベンの超自然の力ではなく、追い詰められていくオーブリーの心の内にあると言える。「吸血鬼」はいくつか不可解な点を持っている。たとえバースペンはアイアンシーを襲う時、なぜ短剣を必要とするのか。短剣の鞘だけを後生大事に取っておくのはなぜか。アイアンシーは森の中で襲いながら、ミス・オーブリーの血を吸うために結婚初夜まで待つのはどうしてなのか。こうした疑問点は残るにしても、「吸血鬼」には読者を一気に結末まで読み通させる力、魅力を持っている。そしてその力は吸血鬼ルースベンではなく、吸血鬼に追い詰められていくオーブリーの心の内に存在する。

ツイッチェルが「結局、ポリドリの小説は……一八二〇年代までに正式に吸血鬼を小説とドラマの中に送り出したこと、バイロンの名前で出版されたためにそれが『文学上の大きな出来事』になったという二つの理由で人々の記憶に残る(もし人々の記憶に少しでも残るとすれば)」と言っているように、吸血鬼を小説の世界に紹介したことがポリドリの最大の功績であろう。

(二) 「カーミラ」

レ・ファニユの「カーミラ」は一八七二年に出版された「おぼろげな鏡の中で」(*In a Glass Darkly*)の中の一編である。時代は、カルシュタイン伯爵夫人マーカラの肖像画に一六九八年と印され、物語はそれから約一五〇年に起るので、およそ一八五〇年頃と考えられる。舞台となっているのは、オーストリアのステイリア、つまりシュタイアーマルクにある森の中の城(シュロス)である。レ・ファニユは舞台を設定するにあたって、ゴシック小説の伝統を踏襲している。主人公ローラが父親と住むこの城は、ラドクリックの世界を髣髴させる。城は深い森の中の小高いところにある、近所に人家はない。回りを堀に囲まれ、ローラが覚えている限り上げられたことのない、はね橋がかかっている。城内にはゴシック様式の礼拝堂があり、そばには同じくゴシック様式の橋がかかっている。ローラは自分の住んでいるところを「孤独で原始的な」と呼ぶが、同時に自然の美しさに恵まれていることに満足感を覚え、情景描写にあたっては「絵のような」という言葉を多用する。レ・フ

アニュはこの美しい自然に囲まれた孤立した城の中で、ローラが吸血鬼カミーラに「愛され」血を吸われていく様を克明に描く。そしてカミーラに伝説の中に現れる吸血鬼の姿を忠実に反映させる。彼は「カミーラ」の中で吸血鬼伝説を利用しながら、独自の世界を作り上げる。それは妖気と不思議な美しさを持った、ロマンティックな世界でもある。

一九歳になるローラは城と回りの景色を描写し、家族構成を説明すると、彼女に「恐ろしい印象を与えた最初の出来事」(五九)を語る。それはすぐに自分の身に起こることとなる、夢のような、幻のような不思議な出来事である。六歳の頃、ローラはある晩目を覚まし、側に子守も乳母もいないのを知り、しくしくと泣きだす。彼女は「私は脅えたのではなかった、というの私は……怪談や「恐ろしい」おとぎ話、言い伝えからは注意深く遠ざけられてきた幸せな子供であった」と、これから話すことは恐怖心が起こした妄想ではないことを強調した上で、次のように続ける。

私はにこりともしない、でもとてもきれいな顔がベッドの横から私を見ているのに気がきました。それは掛

け布団の中に両手を入れて跪いている、若い女性の顔でした。私はうれしくもあり、同時に不思議に思いました。私は泣くのを止めてその女の人を見ていました。その人は私を撫ぜると、ベッドに入ってきて私の側に横になり、笑みを浮かべながら私を抱き寄せました。私はすぐに安心してまたやすやすと眠ってしまいました。私が目を覚ましたのは、まるで二本の針が同時に胸に深く突き刺さったかのような苦痛を感じたからでした。わたしは大声で泣きました。その女性は私をじっと見つめたまま、さっと後ろにさがると、床にすべるように思いました。(五八―九)

ローラが夢を見たのではないことは、『ベッドのくぼんだ所がまだ温かい』(六〇)という女中頭のささやきから明らかである。そして、ヘッセリウス博士に宛てた手紙の中で八年前に起きた出来事を語る二七歳のローラには、それが夢でも幻でもなかったという確信がある。「このことを私が話す理由がやがてお分かりになるでしょう」という言葉は、その確信を示している。

ラミアは子供の血を吸うと言われているが、六歳のローラは、激しい苦痛を感じた胸には何の傷跡もないことが示すように、実際には血を吸われていない。カミーラはやがて起こることを予告したのであり、ローラの成長を実に十三年も待ち続ける。この物語にはボルデンブルグ男爵という吸血鬼に関する専門家が登場し、「結び」と題する最後の十六章でその性癖と習性を説明するが、その中で男爵は吸血鬼の特性の一つとして次のような点を挙げている。

吸血鬼はまるで恋するように、一途に激しく特定の人間に引かれる傾向がある。吸血鬼は倦むことを知らぬ忍耐と策略を使って、この人間を追いかける。特定の人間に近づくことが、色々と邪魔されなくても限らないからだ。欲望を満たし、求める犠牲者の命を吸い取るまで止めない。しかし、こういう場合、吸血鬼は洗練された美食家のように、人を殺す楽しみを少しずつ味わい、長びかせ、口説きに長けた者のようにじわじわと近づきながら、楽しみを大きくする。(二六四―五)

カミーラはローラの成熟を待ち、そして彼女を襲う。

カミーラはローラの住む城に滞在することになるが、そのきっかけは「満月」の晩に起こる、意図的な馬車の事故である。それに先立ってレ・ファニユはカミーラの登場にふさわしい雰囲気作りをする。ローラの家庭教師マドモアゼル・デ・ラフォンテインは、いかにもドイツ人の血を引く女性らしく、「このように明るく輝く月が〔人の心に〕及ぼす影響」(七二)について話す。ローラはスピエルズドルフ將軍が書き送ってきた手紙に影響されて、多少気分がふさいでおり、「けだるい」(七三)状態にある。そこには將軍が娘代わりに可愛がっていた姪が「呪われた情熱」(六九)のために死んだという、その時は訳の分からないことが書かれていた。ローラの父親も同じ手紙が原因して憂鬱な気分になっており、「何か大きな不幸が降りかかろうとしているような気がする」(七四)と言う。カミーラに同行する「人物」はいずれも不気味である。マドモアゼルは馬車の中にいた「醜悪な色の黒い女」(八八)が自分たちを「あざけるようにニヤニヤして」見ているのに気付いている。ローラの母親代わりになっている乳母のマダム・バラドンは、召使いが「そろいもそろって人相の悪い連中」であることを指摘する。ローラの父もそれに同意し、さらに彼ら

が「あつという間に馬車を直してしまった」人間離れた器用さに驚く。

カーミラがローラに近づくと最もおおきな障害となるものは、ローラの脳裏に刻み込まれた恐怖である。彼女に「恐ろしい印象を与えた最初の出来事」は「暗闇に囲まれた走馬灯の中の孤立した光景として鮮やかに」(六三)残っている。事実、ローラはカーミラの顔を初めてはつきりとした時、ほとんど口もきけないほどの恐怖を覚える。しかし、カーミラはこの障害をいともあっさりを取り除いてしまう。ローラを見ると、彼女は『なんて不思議なんでしょう！』と叫び、『十二年前、私は夢の中であなたの顔を見ました。それ以来、あなたの顔は私の脳裏に焼きついています』(九四)と、同時に同じ「夢」を見たことを明かす。カーミラのこの言葉は、それが無かったらローラの心にしつかりと根を下ろしたはずの恐怖に衝撃を与える。ローラにとって「夢」ではなかったはずの出来事は、カーミラと話している内、彼女の意識の中でいつのまにか「夢」にすり代わっていく——というより、それが夢であったか否かはどうでもよくなっていく。カーミラの「美しさ」は、衝撃を受けたローラの恐怖を完全に消してしまふ。ローラの

「彼女のえくぼのある頬は今嬉しくなるほどかわいらしく、知的でした」(九四)という言葉の中に、彼女がいかにあっざりとしてカーミラに心を許したかが窺われる。

さらにこの事は、ローラがすぐあとでカーミラの手を握ることに表れる。ローラがあまり人との交際を持たず、内気で引込み思案の娘であることは、作品の中に、とりわけ文体によく表れている。彼女は「状況が私を能弁にし、大胆にした」(九五)と言うが、実は彼女の反応は、「恋するように、一途に激しく」引かれる相手に対しては、「何か共感と同意のようなものを渴望する」(二六五)吸血鬼の力がもたらす結果である。互いが見た「夢」について話合うと、ローラの心にはもはや恐怖は微塵もなく、カーミラの「きれいな腕の中に一瞬、しつかり抱きしめられた」(九九)あと、彼女はうれしく思うのである。

城に滞在するようになると、カーミラは吸血鬼であることの徴候を見せる。起きるのはいつも昼過ぎである。昼間の光の中では「だるそう」にしており、体を動かすときに疲れてしまふし、ほとんど物を食べない。彼女が城に来てから間もなくすると、農家の若い娘と豚飼いの若い女房が立て続けに死ぬ。カーミラが自ら「農民のことなんか気

にしない」(二一四)というように、伯爵夫人であったカーミラにとって、平民の若い娘は単なる「血の供給者」に過ぎない。

さらに顕著な徴候は、葬式の行列に出会った時に現れる。カーミラは賛美歌に耐えられない。葬式の行列から聞こえてくる賛美歌を聞くと、彼女はローラが不安になるほど青ざめる。そして歯を噛み締め、両手をきつく握り締めたまま、発作を起こしたかのように体中が震える。聖なるものに直面した時のこの反応は、吸血鬼伝説がキリスト教と接触した結果、吸血鬼が示すようになったものである。

城を訪れる旅芸人が連れてくる犬は「はね橋のところでもさん臭そうに立ち止まり」遠吠えを始め、旅芸人がいくら叱っても止めない。吸血鬼伝説では動物は吸血鬼の存在を素早く本能的に感じ取り、こうもりと狼以外は恐怖心からそばに近づかないからだ。

ローラが初めてカーミラに血を吸われるのは、やはり月が明るく輝く夜である。それに先だってローラの父親は『このあたりを襲った奇妙な病気が、今晚はいっそうひどくなった』(二四一)ことを二人の前で言っている。個人的なことを知りたがるローラの好奇心からのらりくらりと逃

れていたカーミラの言葉は、不可解であり、謎に満ちている。

『……あなたにすべてを教えてあげる時はすぐそばまで来ています。あなたは私を残酷だとか、身勝手だと思うでしょう。でも、愛はいつでも身勝手なもの、激しければ激しいほど、身勝手なものよ。あなたは私がどれほど嫉妬深いか分らないでしょう。あなたは私を愛しながら、一緒に死ななくてはならない。さもなければ、私を憎んで、それでも私と一緒に来る。そして憎みながら死んで行き、死んだあとも憎み続ける。私の生まれつき冷淡な性質の中には、無関心という言葉はないわ』(二四三)

愛する者を殺す定めにある吸血鬼カーミラは、このように予告し、そして実行する。レ・ファニユはカーミラが黒豹に変身してローラを襲う様子を実に詳細に描写する。ローラは再び、夢か現実か区別できない、恐ろしい経験をする。それは彼女が十三年前に経験したことと本質的には同じである。ローラはその夜のことを「悪夢とは呼べない」

と言うがこれは彼女が半ば目覚めていたことを意味している。吸血鬼は人間が眠りと目覚めの中間の、意識がぼんやりとした微睡の状態にある時に襲うからだ。

私は最後に見たのと全く同じ部屋と家具を見た、あるいは見たように思いました。ただ違うのはとても暗いことでした。そしてベッドの足元を何かが動いているのが見えました。始めはそれをはつきりと識別できなかったのですが、すぐにそれが巨大な猫に似た真っ黒な動物であることが分かりました。全長は四、五フィートほどあるようでした、炉の前の敷物と同じほどありましたが、それは檻に入れられた獣のように、しなやかに、しかし不気味なほどせわしく行ったり来たりしていました。私はお察しのとおり、とても怖かったですですが、叫ぶこともできませんでした。その動きはますます早くなり部屋は急速にどんどん暗くなっていきました。そして、とうとう見えるものはその目だけとなってしまいました。私はそれが軽やかにベッドに乗ってくるのを感じました。二つの大きな目が私の顔に近づき、突然、まるで二本の太い針が一インチか

二インチほどの間隔をあけて私の胸深く突き刺さったかのような、激しい痛みを感じました。私は叫び声をあげて目を覚ましました。部屋は一晚中燃えているろうそくの光に照らされており、ベッドの足元のちょっと右側に、女の人が立っているのが見えました。黒い、ゆるやかな服を着ており、垂らした髪が肩にかかっています。岩といえども、あれほどはじっとしてはいられなかったでしょう。息をしている様子はまったくありません。私がじっと見つめていると、立っている場所を変えたような気がしました。そして戸口に近づき、すぐそばまで行くと、戸が開いて外に出て行きました。(二四七—八)

この直後、カーミラという名がローラの脳裏をかすめる。自分が吸血鬼に襲われたと思ったわけでもなければ、カーミラは吸血鬼かと疑ったわけでもない。ローラは吸血鬼が存在することを考えたこともないのだ。ただ、カーミラが悪いたずらをしたと思っただけである。しかし、カーミラにとって、ローラが見た「女の人」と自分が少しでも結び付くことは大きな危険を意味する。したがってカーミラ

は当然、この危険を回避する方法をあらかじめ考えてある。それはローラとの初対面において、彼女の恐怖を取り除いたのと同じ方法である。つまり、『昨晚はとても怖い思いをした』（一五三）と切り出し、ローラの機先を制して彼女が見たのと同じ「夢」を話してしまふ。同じ夢の「被害者」にすりかわることによって、カーミラは巧みに「加害者」の疑いが自分に及ばないようにする。カーミラの策略はそれに止まらない。恐ろしい夢を再び見ないための用心に、ローラがひょっとして十字架を身につけることのないよう、彼女は『枕の下に置いておいた「旅芸人から買った」お守りを手探りで探し、指がそれに触れた瞬間、その「何か黒い」姿は消えた』ことを加えておく。ローラはこの言葉を用いし、お守りを枕にピンで留めて寝るようになる。障害をすべて取り除いたカーミラはローラの血を吸い続ける。他の犠牲者は血を吸われるとあっさり死んでしまふが、「恋」の相手となったローラは徐々に衰弱の道をたどる。レ・ファニユは吸血鬼に血を吸われた後、犠牲者が死の甘い誘惑に徐々に負けていく様を鮮やかに描いていく。ローラは朝起きると「倦怠」「だるさ」（一五六）を覚え、「不思議な物悲しさ」（一五七）におそわれる。しかし、その

「物悲しさ」を振り払いたいとは思わない。死ぬことをぼんやり考え始め、自分がゆっくりと衰弱しつつあることは分かっている。それをいやだとは思わず、むしろ「甘美な」気分には浸っている。無気力な状態にあるローラは、同時に恐怖感の混ざった「不可解な魅惑」（二五八）を感じている。彼女が経験する最初の変化は「心地よい」ものであるが、それは彼女が「地獄の入り口」のすぐそばにいることを意味している。

さらにレ・ファニユは血を吸われる時の印象、感覚を詳細に描写する。これはプラム・ストーカーが「ドラキュラ」の中でかなり忠実に再現することとなる描写でもある。ローラは当時、毎晩経験した「夢」の世界を自ら分析する。

いくつかのぼんやりとした、不思議な感覚が眠っている私を捕らえました。最も強い感覚は、川の流れるに逆らって泳ぐ時に感じるあの心地よい、ひんやりとした特有の快感でした。これはすぐあとに夢を伴うのですが、それは果てしなく続くようであり、またとてもぼんやりしていて、背景や人物、一貫した行動をどう

しても思い出せません。でも、あとには長く続いた大きな精神の緊張と危険を経験したみたいに、恐ろしい印象と疲労感が残りました。こういう夢を見て目を覚ますと、とても暗い所に見えない人に話しかけた記憶が残っておりました。特にある女性のはっきりした、とても低い声がゆっくりと、まるで遠くにいるかのように話し、私の心に必ず何とも言えず敵意で恐ろしい感じを呼び起こしたのを記憶しておりました。ときには手が私の頬と首をそっと撫でるような感触がありました。温かい唇が私にキスをし、喉に近づいて、そしていつそう長く、いつそう愛しげになるのですが、愛撫はそこを動かなくなる——そんな感触がすることもありました。私の心臓は高鳴り、呼吸は早く深くなりました。そのあと私は喉を締めつけられるような感覚を覚えながらすすり泣くのですが、それは恐ろしいけいれんに変わり、感覚も意識もなくなってしまうのでした。(一五八一—一六〇)

「夢」は三週間続き、ローラの衰弱は鈍感な面を見せてきた父親さえも心配させるほどになる。しかし、彼女は「今

から思えば不思議なほど強情に」(一六〇) 異常を認めようとせず、「病的な沈黙」(一六一)を守る。八年の歳月を置いて当時を振り返っているローラは、「もし自分の状態を理解することができたら、跪いてでも助けと忠告を求めたことでしょう」と仮定法を使って言わざるを得ないのであり、その不自然さを「私は知らない内に麻酔にかけられており、感覚が麻痺していました」としか説明できない。

「地獄の入り口」に足を踏み入れようとしたローラを救うのは母親の霊である。幼い娘を残して死んだ母親は、娘が吸血鬼に殺されようとした時、夢の中に現れ「甘く優しい、そして同時に恐ろしい」(一六二)声で危険を知らせる。それはローラがカーミラに血を吸われる最後となる夜のことであり、おそらく母親の警告がなければローラは死んでいたであろうと推測できる。母親の霊はたった一度しか現れないが、それを境にカーミラは一気に追い詰められていく。そして彼女を追い詰めていくものは、スピエルズドルフ将軍がもたらす情報であり、ポルデンブルグ男爵の知識である。

娘の様子がおかしいことに気付いた父親は、スピエルズベルグ医師を呼び、娘を診てもらおう。医師は彼女から話を

聞いたあと、「一抹の恐怖の混ざった興味」(二七六)を示しながら彼女をじっと見ていることや、父親にローラの胸にある「小指の先ぐらいの小さな青い傷」(二八〇)を見せられていることから、正しい診断を下していることが分かる。しかし、原因が吸血鬼であることが分かって、その正体を知るにはまだ情報不足である。その情報は、娘代わりに可愛がっていた姪のバーサを失い、激しい復讐心に燃えるスピエルズドルフ將軍によってもたらされる。この作品における將軍の役割は大きい。彼が物語に実際に姿を見せる前に、スピエルズドルフという名はヒロインの父親に宛てた二通の手紙によって、読者の心に刻み込まれる。最初の手紙はカーミラがローラの域に到着する直前に届く。次の手紙が着くのはカーミラが吸血鬼であることをつきとめる直前である。彼の手紙は、物語が大きな転機を迎えようとしていることの前兆となっているのである。彼にはさらに大きな役割が課せられている。吸血鬼が人間の生き血を吸う現場を目撃し、なおかつその顔を見ろという、ただ一人の証人としての役割である。したがって、將軍がカーミラを吸血鬼と見破れる唯一の人物ということになる。

作品に登場した將軍は、ローラと父親に、まるでこれま

での物語の要約であるかのような話をする。それほど、バーサとローラの身に起こったことは類似している。このことは吸血鬼が同じ手口を繰り返すことを意味している。ただ違う点は、ローラは危ういところを母親の霊に助けられたが、アナグラムによってミラーカと名前を変えていた吸血鬼はバーサを殺していることだ。さらに將軍は吸血鬼がバーサを襲う場面を目撃し、顔を見てそれがミラーカであることを知っている。「グラッツからやって来た年配の医師」(二三九)がバーサは「吸血鬼の訪れに苦しんでいる」(二四三)と診断した時、もう一人の若い方の医師はあからさまに嘲笑した。他の時なら同じ反応を示したかもしれない將軍は姪を助きたい一心から老医師の言葉を信用し、彼女の寝室に潜んでいた。事実、そこに吸血鬼は現れた。しかし、彼は姪が血を吸われるのを防ぐことができなかった。目の前の、あまりにも異様な光景に「しばらく茫然自失して立ちすくんでしまった」(二四六)ためである。彼は復讐心に取り憑かれ、ミラーカを追う。そして——レ・ファニエはその方法を明らかにほしくないが——將軍はミラーカがカルンシュタイン伯爵夫人マーカラであることを突きとめる。彼は今、彼女の墓を掘り返し、首を切り落とす目的で

カルンシュタイン家の墓地へ行くところである。

しかし、スピエルズドルフ將軍にできるのは、墓地にたどり着くところまでである。彼は伯爵夫人の墓の正確な位置を知らないからだ。カルンシュタイン家の礼拝堂で、將軍とぼったり出会ったカーミラは、ローラと父の前で吸血鬼の本性を表し、墓に逃げ帰る。その墓を探しあててには、ウイリアム・パトリック・デイが「バンパイア・キラー」と呼ぶ吸血鬼の専門家、ボルデンブルグ男爵の知識が必要となる。男爵は先祖が残した記録を手掛かりに、カルンシュタイン伯爵夫人の墓を探しあてて。その墓を開けた時の光景は読者の脳裏に深く鮮明に焼き付く、忘れることのできない凄惨な光景である。

その顔は、埋葬されてから百五十年たっておりましたが、生命の温もりに色付いていました。目は開いたままで、柩からは死臭はありませんでした。役所の命を受けてやって来た医師と調査を依頼した側が派遣した医師の二人は、かすかではありましたが感じ取れる呼吸とそれに応じた心臓の動きがあるという、驚くべき事実を証言しました。手足はまったくしなやかさを失

っており、肉は弾力性を保っていました。鉛の柩には七インチの深さに溜まった血の中に浸って、死体が横たわっていました。そこには一般に吸血鬼であると認められる徴候と証拠がありました。そこで古くからの慣例に従い、死体が持ちあげられ、吸血鬼の心臓に鋭い杭が打ち込まれました。その瞬間、吸血鬼は生きている人間が断末魔の苦しみの中で上げているとしか思えないような、鋭い悲鳴を上げました。それから頭が切り落とされましたが、切られた首からは、どっと血が流れ出たのです。胴体と頭部は積み上げた薪の上に置かれ、灰にされると川に流されました。以後その地方に吸血鬼が現れることはなくなりました。(二五八—二六〇)

ローラはこの現場に立ち会ったわけではない。彼女は父親が持っていた公式の報告書の写しを見て、「この最後の恐ろしい光景を要約した」(二六〇)だけである。この報告書には、カルンシュタイン伯爵夫人マーカーラの「処刑」に立ち会ったすべての人が、内容に嘘偽りのないことを証明するために署名してある、とローラは付け加える。カーミラ

の姿が消えて以来、ローラの「夜の苦しみ」(二五七)は終わり、そしてこの物語も終わる。

カーミラが礼拝堂でスピエルズドルフ將軍に出会った瞬間、本性を剥き出しにして逃げだしたように、吸血鬼は吸血鬼であると見破られることを何よりも恐れる。だからこそ、正体を隠すために「倦むことをしらぬ忍耐と策略」を發揮しなくてはならない。また、吸血鬼は大きな弱点を持った「怪物」であることも明らかだ。墓を見つけられたカーミラは、なす術もなくあっさりと滅ぼされてしまう。昔、カルンシュタインの村人を悩ませた吸血鬼を退治したのは、吸血鬼の研究に没頭し、豊富な知識を持った「モラビアの貴族」(二三四)であったように、吸血鬼は吸血鬼に関する知識を持った人間の前ではほとんど無力に等しい状態になってしまうからだ。この弱点は「ドラキュラ」の中で一層明らかにされることになる。

「カーミラ」は言うまでもなく吸血鬼を主題にした作品であり、吸血鬼伝説に基づいて描かれる吸血鬼の姿、習性、超自然の力と弱点は読者の関心を捕えて放さない。しかし、この作品は単に吸血鬼が若い娘の血を吸い、最後に

滅ぼされるというだけの物語ではない。幼いローラに狙いをつけ、その成長を待つて襲うカーミラの執念と策略、ローラの血を吸う場面や上記の処刑場面等は読者に強烈な印象を与えるが、同時に我々の心に強く残るものは、美しい自然に囲まれた、孤立した城の中で練り広げられるローラとカーミラのロマンティックな官能の世界である。

カーミラは若い娘の血だけを吸う吸血鬼であり、狙った相手の「何か共感と同意のようなものを渴望する」ために「相思相愛」の仲になる。また、その渴望を満たす時間を得るために相手の住む場所にはばらく滞在しなくてはならないが、そのためには相手が同性であることが必要となる。同性である故に警戒されないからだ。もしカーミラが男だったら、スピエルズドルフ將軍もローラの父親も、あのようにいとも簡単に自分の城に招き入れ、滞在を許すことはなかっただろう。カーミラにとって、レズビアンであることは吸血鬼であり続けるための必要条件であり、またローラの父親に『……自然——すべてのものは自然から生じるのではありませんか。天国、地上、そして地獄にあるすべてのものは自然が定めた通りに行動し、生きるのではありませんか。私はそう思います』(二二四)と云っている

ように、吸血鬼であることもレズビアンであることも、彼女にとっては自然なことなのだ。

カーミラは計画通り、ローラの城に滞在することに成功し、ただちに「求愛」行為を開始する。これは当然のことだ。しかし、読者にとって印象的なのは、それに対するローラの反応である。彼女は最初の恐怖がなくなると、カーミラの求愛に積極的に応えていく。それも吸血鬼が持つ超自然の力の一部であろうが、どうもローラ自身の中にレズビアンが流れているように思えて仕方ない。確かに彼女の回りには性的な愛の対象となり得る人物はいなかった。ローラは冒頭で自分が住む城がいかにも「寂しい」所であるかを強調している。彼女の回りにいる人といえば父親と乳母のマダム・ペロドン、家庭教師のマドモアゼル・デ・ラフォンテインの三人だけであり、若い男性はいない。しかし、このことがただちにカーミラの同性愛に応えることの動機とはなり得ない。

たしかにローラはレズビアニズムに陶醉するだけではなく、それに対する嫌悪感も覚えている。彼女はカーミラに初めて会った時、「美しい客に不思議に引かれるのを感じた」(九八)のと同時に、「多少の嫌悪感」が混じっ

ていたと言う。このカーミラに対するアンビバレンスは、何度もローラ自身によって繰り返言及される。カーミラの愛撫を受ける場面の描写になると、「悦び」と「嫌悪」を意味する言葉が多用される。この現象はカーミラへの「愛」が強まることに比例して、著しくなる。

このような愚かしい抱擁はたびたび起こるわけではありませんでしたが、私はそれから身を振りほどきたいとも願ったことを認めなくてはなりません。でも、私の体からは力が抜けてしまったような気がしました。彼女が囁く言葉は私の耳には子守歌のように聞こえ、抵抗する力は消え失せ、うっとりとしてしまうのです。彼女が私から腕を放すとようやく、元の自分に戻ったようでした。

私はこういう不可解な気分になっている時の彼女を好きにはなれませんでした。私は不思議な激しい興奮を経験しましたが、それは時折、恐怖と嫌悪感の入り混じった、快いものでもありません。このような情景が続いている間、私は彼女についてはっきりと考えられなかったのですが、愛が慕情とそしてまた憎悪へと

変わっていくのが分かりました。矛盾であることは分か
かっておりますが、その時の気持ちは他に説明のしよ
うがないのです。(二〇七—八)

カミーラの「恋人のような情熱」(二〇九)を「おぞまし
く」思いながらも、ローラはそれに溺れていく。カミーラ
の「震える抱擁の中できつく抱き締められ」「そっと優し
くキスをする彼女の唇が「ローラの」頬に熱くもえる」
(二〇七)と、彼女の理性は停止してしまい、カミーラが囁
く強い暗示に満ちた「情熱的な言葉」の意味を考えること
もできなくなってしまう。ローラはただ、「彼女の動揺と
言葉は、私には訳が分からなかった」というだけである。
ローラはカミーラが個人的なことを何も教えようとしない
ことに腹を立てるが、カミーラは彼女の首に「きれいな腕
を回して抱き寄せる」と、頬をつけながら耳元で囁く。

『愛しい人、あなたの小さな心は傷ついているのね。
私が自分の力と弱さのどうにもならない定めに従うか
らといって、私を冷酷と思わないで。あなたの愛しい
心が傷つくと激しく乱れる私の心は血を流すのよ。大

きな屈辱の喜びを味わいながら、私はあなたの温かい
命の中に生きる。そしてあなたは死んでいく——あな
たは死んで、甘美な死をとげて、私の命となる。私に
はそれを止められない。私があるに近づくと、あな
たは他の人に近づいていき、愛であることに変わりの
ない、あの残酷の大きな喜びを知ることになる……』
(二〇六—七)

カミーラはローラの宿命を暗示している。吸血鬼に血を吸
われて死んだ人間は、ほとんど常に墓の中で吸血鬼になる
ことは、ボルデンブルグ男爵が明らかにしている。(二六七)
ローラは吸血鬼となり、やがて若い娘に近づいて「愛であ
ることに変わりのない、あの残酷の大きな喜びを知る」だ
ろうと予言しているわけであるが、このことは、カミーラ
自身が同じようにして吸血鬼になったことを意味する。事
実、男爵は「これは美しきマーカラの身に起きたことで、
彼女は吸血鬼に取り憑かれたのだ」と言っている。男爵の
言葉を借りるまでもなく、カミーラはローラに自分が吸血
鬼になった経緯を暗示する。⁽¹⁵⁾

『……私はベッドで危うく殺されかけたのよ、ここに怪我をして』『カーミラ』は自分の胸に触った。『それ以後、私は同じではなくなりました』

『死にかけたの』

『ええ。私の命を奪いかけたのは、とても——残酷な愛、不思議な愛でした。愛には犠牲がつきもの、そして犠牲は必ず血を伴うもの……』(一四四)(傍点・フアニユ)

ローラにはカーミラが囁く言葉の意味は理解できない。というより、理解しようとしな。彼女は「おぞましさ」「嫌悪感」「憎悪」を感じながら、少なくともそういう言葉を口にしたが、深みにはまり込んでいく十九歳の自分の姿を描いている。前述の通り、この物語は、二十七歳のローラが八年前に起きた出来事を思い出しながら手紙を書くという形式を取っている。ローラは内気でしとやかな淑女だ。そういうローラが同性愛に溺れていった自分を顧みる時、「おぞましさ」を強調しても不思議はない。しかし、彼女の意図とは裏腹に、彼女の本心は時には言葉のはしはしに、そして時には沈黙の中に表れる。カーミラが『私は

誰とも恋なんかしたことないし、これからもないわ、相手があなたでない限り』(二三四)と「愛の告白」をすると、ローラはその言葉には全く触れず、「彼女は月の光の中でどれほど美しく見えたことか!」(二三五)と言うだけである。カーミラの愛に感動し、それを喜んで受け入れているのだ。カーミラが、明日城を出発するつもりですと言うと、父親は、ローラが「とてもほっとしたことに」(一四〇)それを止めてくれる。彼女の安堵感には少しもアンビバレンスは感じられない。

ローラは「私は十年以上の歳月が経った今、自分でも知らずに経験していた試練におけるいくつかの出来事と状況を、混乱した恐ろしい記憶を蘇らせながら、震える手で書いております⁽¹⁶⁾」(二〇八)と言うが、「震える手」は恐ろしさのためであろうか。ローラの口調はそうでないことを示している。「そして私は客間の入口にカーミラの軽い足音を聞いたような気がして、はっと白昼夢から覚めることが度々ございます」(二六九)という最後の言葉が示すように、彼女は懐かしむように、八年前の出来事を思い出している。カーミラは吸血鬼カルンシュタイン伯爵夫人マーカラとしてではなく、自分を愛してくれた女性として、今だ

にローラの心に生きていく。このことは凶らずも彼女がカーミラの外見描写をするところに表れる。ローラはカーミラの髪について「私は肩に垂らした時には、あれほどすばらしく豊かで長い髪を見たことはありませんでした」(一〇三)と述べたあと、突然、現在完了を使って「私は度々、「カーミラの髪」の下に手を置いては、その重さに驚きながら笑ったものでした」と言う。本来なら過去完了となるべきところに現在完了が使われているという時制の混乱は、そのままローラ自身の混乱した気持ちを表している。彼女はカーミラの髪と戯れた思い出を語ったあと、このバラグラフを「すべてを知ってさえいたら！」という言葉で終わらせる。

今はすべてを知っているローラではあるが、彼女はカーミラと吸血鬼を結びつけることに対して、強い拒絶反応を示す。彼女は作品を通して、ついに一度もカーミラの鋭い犬歯には言及しない。カーミラの美しさを詳細に描いても、歯の特徴にはふれようとしなない。それを指摘するのは、城を訪れる旅芸人だけである。この現象は、物語がクライマックスに近づくとつれて顕著になり、不自然な印象すら与える。スピエルズドルフ将軍がバーサの身に起きた

出来事を語ると、ローラはそれが自分の経験と酷似していることに「奇妙な気持ち」(二二七)を抱く。さらに彼女は、将軍の家の客となったミラーカと、いま自分の城に滞在するカーミラの「習慣と不可解な特徴」が同じであることにも驚きを感じる。しかし、ローラの心には、カーミラに対する疑惑は少しも起きてこない。それどころか、将軍の話聞いた直後、廃墟となったカ alun シュタイン家の礼拝堂の中でカーミラの声を聞くと、ローラはほっと安心し、「カーミラの美しい顔と姿が暗い礼拝堂に入ってくるのを見て嬉しく」(二四七)思うのである。ローラはすぐそのあと、将軍を見たカーミラが残忍な形相に変わり、斧を持って襲いかかる将軍の手をつかみ、ものすごい力で斧を落とさせてしまう場面を目撃する。それでもローラはカーミラこそミラーカであり、吸血鬼であることに気が付かない、というより、気付くことを無意識に拒絶している。礼拝堂での出来事については「私には何の説明もなされず、父はそれを当分の間、私には秘密にしておこうと決めたことは明らかでした」(二五六)と言うだけで、目の前を見たカーミラの恐ろしい変身が何を意味するかを深く考えようとしない。さらに彼女は、その夜、娘が眠っている間、安

全であるようにと父親が取った「異常なほどの用心の理由」(二五七)を理解できなかった、と言う。そのすぐあとでローラは「二、三日後、私はすべてをはっきりと知りました」と続ける。カルンシュタイン伯爵夫人の処刑の様子を報告書で知ったことを意味しているが、彼女がカーミラと吸血鬼を結びつける根拠は、奇妙なことに、自らの直接体験ではなく、一般的に信じられている吸血鬼伝説なのだ。

私としては、この国の人々が昔から多くの証言に基づいて信じていること以外に、自分の目で見たことや経験したことを説明する理論をこれまで聞いたことはございません。(二五八)

ローラには今だに自分の経験に基づく確信は見られない。手紙の中で自らの経験を語るローラは、ある重大な情報を極めてさり気なく、それもたった一度だけ口にする。そしてそれが表す意味には全く言及しようとしなない。彼女はカルンシュタイン伯爵夫人マーカラの肖像画を見ながら、カーミラに『私はカルンシュタイン家の子孫なの、つま

り、母がそうでした』(二三二)と教える。彼女はこの同じ情報を今度は父親のさり気ない言葉の中で伝える。彼はスピエルズドルフ將軍との会話の中で「私の姑はカルンシュタイン家の出でした」(一九五)と言う。ローラとカーミラは血縁であったということであり、二人はレズビアンであったばかりか、近親相姦であったことにもなる。同じことはバーサについても言える。ローラの父は、カルンシュタイン家の荒れ果てた礼拝堂の墓を調べたいと言う將軍に『あなたが爵位と財産を要求することを考えているといいんですがねえ』(一九四)と冗談めいて言う。この言葉は將軍がカルンシュタインの血を引いていることを示している。ということは、バーサもまた、カルンシュタイン家の血縁であることになる。ローラとカーミラ、バーサとミラーカは同じ関係の繰り返しなのだ。

カルンシュタイン伯爵夫人マーカラの墓がある場所を探し当てるボルデンブルグ男爵は、実はその昔、カルンシュタインの村で吸血鬼を退治した「モラビアの貴族」の子孫であることを自ら告げる。この「モラビアの貴族」は若い頃、マーカラを熱烈に愛した。彼女が若くして死んだため、彼は「悲しみのどん底に突き落とされる」が、その死

因を知ると吸血鬼の研究に没頭する。そして村で起こった吸血鬼騒ぎのあと、やがてマーカラに吸血鬼の疑いがかかるであろうと確信した。彼は「たとえ彼女がどのようなものになったにせよ、無残な死後の処刑によって、その遺骸が汚される」(二六八)ことに恐怖を抱き、マーカラの墓を移したと人々に思わせた。彼女の墓の所在が謎となったのは、そのためである。吸血鬼の習性を熟知する彼は、晩年、自らの行為の恐ろしさを悟り、彼女の墓がある場所を書き留めた。そして今、祖先の過ちは多くの犠牲を出したあと、子孫にとって償われた。

このように考えていくと、「カーミラ」という作品が描く世界は、血と情熱という因縁にとつて閉ざされた世界であることが分かってくる。スピエルズドルフ將軍はカルンシュタイン家を「邪悪な家系」(二二九)と呼び、荒廃したカルンシュタインの域の中で「ここで血に汚された年代記が書かれた」と言う。カルンシュタイン家の人間は、次々と吸血鬼になっていった——吸血鬼はまず最初に、生前最も愛した人間、つまり、肉親や配偶者を襲うからだ。⁽¹⁷⁾そして次に村人を襲った。多くの人間が殺されたあと、吸血鬼は退治されたが、マーカラの墓だけは見つからなかった。

百五十年近く経って再び地上に現われたマーカラは、血の繋がったバーサを愛し、命を奪い、それからすぐあと、同じように血の繋がったローラを愛し、殺しかけた。そしてその吸血鬼を滅ぼしたのは、マーカラを愛した男の子孫であった。このように因果は巡り、そして物語は終わる。ローラの手紙を出版した「私」なる人物は、彼女との文通を望むが、ローラはもはやこの世にいない。情報源を絶たれていることを予め「序文」で知らされている読者は、吸血鬼の存在そのものを疑うことが無駄であり、文面をそのまま信じるしかないことを承知している。それと同時に、カーミラの正体を知りつつ、彼女を懐かしむように「客間の入口にカーミラの軽い足音を聞いたような気がして、はっと白昼夢から覚めることが度々ございます」という言葉で手紙を結んでいる、今は亡きローラの姿を思い浮かべると、吸血鬼を扱ったこの物語が不思議な哀愁を帯びてくるような気がしてならない。

注

(1) この吸血鬼像を定着させたのは「ドラキュラ」という作品そのものではなく、スクリーン上で見たドラキュラである。とくにクリストファ・リーが演じたドラキュラが最も

印象的である。ドラキュラという名前は広く世に知れ渡っているが、作品そのものはほとんど読まれないのは、「フランケンシュタイン」と同じである。なお、スクリーン上の吸血鬼については「ドラキュラ伝説——吸血鬼のふるさとをたずねて」(レイモンド・T・マクナリ、ラドウ・フロレンス著 矢野浩三郎訳、角川選書26)の第八章を参照。

- (2) 吸血鬼伝説については同書および James B. Twitchell, *The Living Dead: a Study of the Vampire in Romantic Literature* (Duke University Press, 1981), Dorothy Scarborough, *The Supernatural in Modern English Fiction* (Octagon Books, Inc., 1967), Montague Summers, *The Vampire in Europe* (The Aquarian Press, Ltd., 1980)を参照した。また、デズモンド・ヴァーマは「吸血鬼ヴァーニー、あるいは血の饗宴」(アーノ・プレス、一九七〇)の序文で吸血鬼伝説に触れている。
- (3) ポーター・クイニンツ編 *Great British Tales of Terrors* (Penguin Books, 1983) の二八七ページ。以後の引用はこの版による。
- (4) 「ドラキュラ伝説——吸血鬼のふるさとをたずねて」一九一〜一九二ページ。

(5) ルースベンがなぜ吸血鬼には本来、必要ない短剣を持つ

ているかという疑問に対しツイッチェルは「ポリドリは文学的伝統の名残である短剣を含めて、吸血鬼神話よりロシックの伝統をより意識していたのであろう」(一一一)と言っている。

- (6) マリオ・ブラッチは *The Romantic Agony* (Oxford University Press, 1985) の中で「ルースベン卿はギリムヤで殺され(月の光を浴びて)、吸血鬼になる」と言っている。この解釈も可能であろう。ヘクター・レッドが *The Tale of Terror* (Russel & Russell, 1963) の中(一七三ページ)指摘しているように、ポリドリは「出来事を起こるままに述べ、読者に自分なりの結論を出させる」書き方をする。
- (7) ツイッチェルは「オーブレーとルースベンの間にはミネルギーをめぐる絶えざる戦いがある。すなわち、オーブレーが衰弱するとルースベンは強くなり、オーブレーの健康が安定するとルースベンは徐々に青ざめていく」(一一〇)と言ふ。
- (8) Devendra Varma, ed. *The Collected Works of Joseph Sheridan Le Fanu* Vol. III, *In a Glass Darkly* (Arno Press, 1977) 五二二ページ。以後の引用はこの版による。

(9) 吸血鬼が血を吸う場所は伝説によって異なる。「吸血鬼」と「ドラキュラ」では首であったが、「カーミラ」のよう

に胸のこともあれば、腕、さらには足の指であることもある。*The Living Dead* 十ページ。

- (10) 十二という数字は計算上合わない。ローラは十九歳の時の出来事を書いていると言っているから、正確には十三年前でなくてはならない。

- (11) *The Living Dead* 十三ページと十六ページ。

- (12) 例えば、カミーラの母と称する女性は、城に彼女を預けて出発しようとする寸前、彼を脇に呼んで内緒話をするが、その時の態度の急変に全く気が付かない。一方、ローラはそれを敏感に感じ取っている。また、カルンシュタイン伯爵夫人マーカーラの肖像画とカミーラが瓜二つであることにも驚きを示さない。

- (13) このことについてボルデンブルグ男爵は次のように言う。「吸血鬼は明らかに、ある種の状況では、特定の条件に従うようです。私が申し上げた例では、マーカーラは本名を使わない時は元の名を構成する文字を一字も抜かしたり足したりせず、私たちがアナグラムと呼ぶ方法で作り返した名前だけを使ったようです」(二六五)

- (14) William Patrick Day, *In the Circles of Fear and Desire* (The University of Chicago Press, 1985) 八八ページ。

- (15) この点に関してウィリアム・パトリック・デイは「ボル

デンブルグはカミーラが自殺したため、吸血鬼になったことを暗示する」(八八)と言う。確かに男爵は「吸血鬼がどのようにして生まれ、増えていくのか、お話しいたしまししょう。多少なりとも邪悪な人間が自ら命を絶つとして、自殺者はある種の状況下では吸血鬼になります」と言っているが、これはマーカーラの身に起きたことではないことは、すぐそのあとに続く男爵の説明から明らかである。

- (16) (3)で触れた通り、ローラは十九歳の時の出来事を、八年後に思い出しながら手紙に書いている。この単純な間違いは、手紙を書きながら彼女の心がひどく動揺したために生じたと考えるべきであろう。

- (17) *The Living Dead* 十ページ。